広報なばり
市政と暮らしを結ぶ情報紙
1－2号 No.1084
毎月4回発行（日曜日）
ケータイHP
2015年（平成27年） 1月11日回発行

主な内容

1……阪神・淡路大震災から20年。あの時、見た光景
2～3……市立病院だより「きらり」
4……2月の相談、新コーナー「素敵にスマイル」

発行／名張市企画財政部広報対話室 〒518-0492 名張市鴻之台1-1 ☎0595－63－7402 pr@city.nabari.mie.jp HP http://www.city.nabari.lg.jp

平成7年1月17日の午前5時46分。
淡路島北淡町を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生

阪神・淡路大震災から20年

あの時、見た光景

毎年、神戸にある東遊園地（ひがしゆうえんち）では、地震発生時刻に犠牲者を追悼

阪神・淡路大震災を体験したという名張在住のお二人に、当時の様子、そして学ぶべき教訓を聞きました。

問 危機管理室 ☎63-7271

■食器が割れる音は、今でも耳に残っています

私は、震災が起きた一年後に名張に転居してきました。地震の怖さを体験したからです。

当時、私は尼崎のマンションで妻と二人暮らし。朝起きて着替えていると、外が稲光のように光ると同時に大きな揺れが起きました。食器棚から食器が飛び出し割れる音は今でも耳に残っています。寝室にいた妻は、タンスが倒れましたが、運よく下敷きを免れました。

ライフラインが止まり、電話を掛けようとテレフォンカードを持って外に出ると、公衆電話は長蛇の列。やっと順番が来たのにカードが使えず困っていると、後ろの人が20円を貸してくれました。そのときの20円がとても有り難かったのを覚えています。

当時、私がいた職場は、粉ミルクの製造会社だったので、各地の避難所を回って粉ミルクの配布もしました。多くの避難所が混乱していて、ミルクはあっても哺乳瓶が足らないという被災者の声も聞きました。

私の住む地域は、防災訓練をはじめ熱心にまちづくりに取り組んでいます。私もできる限り防災訓練には参加します。時間が経つと人って忘れてしまうものです。だから、日ごろの訓練はとても大事だと思います。

喜連（きれん） 功（いさお） さん
（すずらん台西3）

■新聞記者として忘れることができない取材。震災の記憶は風化させない

3年前の東日本大震災までは、戦後最大といわれた自然災害。その現場取材に関われたのは、新聞記者として忘れることのできない出来事の一つです。

何もかもが壊れ、焼けてなくなった町を見て、両親から子どものころに聞かされた戦時中の空襲による焼け野原となった様子と何か重なるようなものがありました。

自問自答しながら取材が始まりました。中でも小中学生の遺族への取材は、非常にエネルギーを使いました。住所地に行っても、家はありません。残った柱に「○○○にいます」と書かれたメッセージを頼りに、1軒1軒あたりました。

「子どもさんの生きた証を新聞で残してあげたい」と必死でお願いしました。遺族から罵声を浴びせられることもありました。当たり前です。つらい思いをしながら生きている遺族に、亡くなった子どものことを聞くのは、新聞記者としていいのかと。毎日悩みました。しかし、震災のことを忘れないでもらうために取材し、書き続けようと決心しました。

名張も2年前から市民総ぐるみの総合防災訓練を実施しています。多くの市民が防災に関心が高いことが、取材を通じて分かりました。

冷静に、迅速に対応するには、自分の命は自分で守るという「自助」。そして互いが助け合う「共助」の心を持つこと。決して行政に頼ってはいけません。行政による「公助」は、災害後の補償（仮設住宅とか、生活再建支援金など）を指します。それは阪神・淡路大震災、東日本大震災でも教訓になっています。ペットボトル1本の水、動きやすい運動靴を用意しておくだけでもいいです。こうした心掛けを持つことが、災害に強い町になっていくのだと思います。

読売新聞
名張通信部
加藤 律郎（りつろう） 記者

【市総合防災訓練について】 昨年11月30日に開催した市総合防災訓練では、約15,000人の市民の皆さんが参加。一時避難所までの避難や避難所開設・運営訓練などを行っていただきました。各地域の訓練の課題やアンケート結果などは、検証した上で皆さまに公表します。